

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷四十二第

行發日一月五年二和昭

## 論叢

分配論の性質

九州帝國大學  
教授 文學博士

高田 保馬

中世の港

教授 文學博士

三浦 周行

勤勉獎勵目的の課税

教授 法學博士

神戸 正雄

純粹國家

助教授 法學博士

作田 莊一

## 說苑

ロッシヤーとヘーゲル哲學

講師 文學博士

米田 庄太郎

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

琉球最後の王朝とヘルリ提督

教授 法學博士

山本 美越乃

## 雜錄

指數の形式と指數の目的

助教授 經濟學士

蛭川 虎三

比較性なき統計的計數

經濟學士

菊田 太郎

## 法令

銀行法・震災手形損失補償公債法・震災手形善後處理法・兌換銀行券整理法・公益質屋法・海外移住組合法・輸出絹織物取締法

# 銀行法

法律第二十二號 (昭和二年三月二十九日)

## 銀行法

第一條 左ニ掲グル業務ヲ營ム者ハ之ヲ銀行トス

一 預金ノ受入ト金錢ノ貸付又ハ手形ノ割引トヲ併セ爲スコトヲ得ズ

二 爲替取引ヲ爲スコト

營業トシテ預金ノ受入ヲ爲ス者ハ之ヲ銀行ト看做ス

第二條 銀行業ハ主務大臣ノ免許ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ營ムコトヲ得ズ

第三條 銀行業ハ資本金百萬圓以上 株式會社ニ非ザレバ之ヲ營ムコトヲ得ズ但シ勅令ヲ以テ指定スル地域ニ本店又ハ支店ノ有スル銀行ノ資本金ハ二百萬圓ノ下ルコトヲ得ズ

前項但書ノ規定ニ依リ地域ノ指定アリテ場合ニ於テ其ノ地域ニ本店又ハ支店ヲ有スル銀行ニシテ資本金二百萬圓未滿ノモノハ指定ノ日ヨリ五年ヲ限リ前項但書ノ資本金ニ依ラザルコトヲ得

第四條 銀行ハ其ノ商號中ニ銀行ナル文字ヲ用フベシ

銀行ニ非ザルモノハ其ノ商號中ニ銀行ナルコトヲ示スベキ文字ヲ用フルコトヲ得ズ

第五條 銀行ハ擔保附社債信託法ニ依リ擔保附社債ニ關スル信託業務ヲ營ミ又ハ保護預リ其ノ他ノ銀行業ニ附隨スル業務ヲ營ムノ外他ノ業務ヲ營ムコトヲ得ズ

第六條 銀行ハ左ノ場合ニ於テハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

一 商號ヲ變更セントスルトキ

第二十四條 九三二 第五號 一五六

二 資本金ヲ變更セントスルトキ

三 支店其ノ他ノ營業所又ハ代理店ヲ設置セントスルトキ

四 本店其ノ他ノ營業所ノ位置ヲ變更セントスルトキ

五 支店以外ノ營業所ヲ支店ニ變更セントスルトキ

第七條 銀行ハ代理店主ヲシテ其ノ代理事務ニ關シ代理店ノ出張所其ノ他ノ從タル營業所又ハ復代理店ヲ設ケシムルコトヲ得ズ

銀行ノ代理店主ハ其ノ代理事務ニ關シ代理店ノ出張所其ノ他ノ從タル營業所又ハ復代理店ヲ設ケルコトヲ得ズ

第八條 銀行 資本ノ總額ニ達スル迄ハ利益ヲ配當スル毎ニ準備金トシテ其ノ利益ノ十分ノ一以上ヲ積立ツベシ

第九條 銀行ノ營業年度ハ一月ヨリ六月迄及七月ヨリ十二月迄トス

第十條 銀行ハ營業年度毎ニ業務報告書ヲ作成シテ之ヲ主務大臣ニ提出スベシ

第十一條 銀行ハ營業年度毎ニ主務大臣ノ定ムル様式ニ依リ貸借對照表ヲ作成シテ之ヲ公告スベシ

第十二條 銀行ノ監査役ハ銀行ノ業務及財産ノ狀況ニ關スル調査ノ結果ヲ記載シタル監査書ヲ每營業年度ニ同作成シテ之ヲ本店ニ備ヘ置クベシ

第十三條 銀行ノ常務ニ從事スル取締役又ハ支配人ガ他ノ會社ノ常務ニ從事セントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第十四條 銀行ノ合併ハ主務大臣ノ認可ヲ受クニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第十五條 銀行ガ合併ノ決議ヲ爲シタル場合ニ於テ商法第七十八條第二項ノ規定ニ依リテ爲スベキ催告ハ預金者ニ對シテハ之ヲ爲スコトヲ要セズ

第十六條 銀行ガ合併ノ決議ヲ爲シタル場合ニ於テ商法第七十八條第二項但書ノ期間ハ一月迄之ヲ下スコトヲ得合併ニ因ル

株式併合ノ場合ニ於テ商法第二百二十條ノ二但書ノ期間ニ付  
亦同ジ

第十七條 銀行ガ合併ニ因リテ貯蓄銀行法第一條第一項ノ業務  
ニ屬スル契約ニ基ク權利義務ヲ承繼シタル場合ニ於テハ其ノ  
契約ノ完了スル迄仍其ノ契約ニ關スル業務ニ限りテ之ヲ繼續ス  
ルコトヲ妨グズ

貯蓄銀行法第九條、第十條及第十五條ノ規定ハ前項ノ場合ニ  
之ヲ準用ス

第十八條 銀行ノ休日ハ、祭日、祝日、日曜日其ノ他銀行ノ營  
業所所在地ニ行ハルル一般ノ休日ニ限ル

銀行ガ天災其ノ他避クベカラザル事變ニ因リ臨時ニ休業スル  
トキハ直ニ其ノ旨ヲ公告シ地方長官ニ届出ツベシ

第十九條 銀行ガ預金ノ拂戻ヲ停止スルトキハ直ニ其ノ旨ヲ公  
告シ事出リ具シテ主務大臣ニ届出ツベシ

第二十條 主務大臣ハ何時ニテモ銀行ヲシテ其ノ業務ニ關スル  
報告ヲ爲サシメ又ハ監査書其ノ他ノ書類賬簿ヲ提出セシムル  
コトヲ得

第二十一條 主務大臣ハ何時ニテモ部下ノ官吏ニ命ジテ銀行ノ  
業務及財産ノ狀況ヲ檢査セシムルコトヲ得

第二十二條 主務大臣ハ銀行ノ業務又ハ財産ノ狀況ニ依リ必要  
ト認ムルトキハ業務ヲ停止又ハ財産ノ供託ヲ命ジ其ノ他必要  
ナル命令ヲ スコトヲ得

第二十三條 銀行ガ法令、定款若ハ主務大臣ノ命令ニ違反シ又  
ハ公益ヲ害スベキ行為ヲ爲シタルトキハ主務大臣ハ業務ヲ停  
止若ハ取締役、監査役ノ改任ヲ命ジ又ハ營業ノ免許ヲ取消ス  
コトヲ得

第二十四條 主務大臣ハ業務ヲ停止ヲ命ゼララレタル銀行ニ對  
シ其ノ整理ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ營業ノ免許ヲ取  
消スコトヲ得

第二十五條 銀行業ノ廢止又ハ銀行ノ解散ノ決議ハ主務大臣ノ  
認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第二十六條 銀行ガ其ノ目的ヲ變更シ他ノ業務ヲ營ム會社トシ  
テ存續スル場合ニ於テハ銀行ニ關スル事務ヲ管理スル主務大  
臣ハ其ノ會社ガ預金債務ヲ完済スルニ至ル迄財産ノ供託ヲ命  
ジ其ノ他必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得合併ニ因リ銀行ニ非ザ  
ル會社ガ銀行ノ預金債務ヲ承繼シタル場合亦同ジ

第二十七條 銀行ガ營業ノ免許ヲ取消サレタルトキハ之ニ因リ  
テ解散ス  
前項ノ場合ニ於テ清算人ハ利害關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權  
ヲ以テ裁判所之ヲ選任ス其ノ清算人ヲ解任亦同ジ  
第二十八條 前條ノ場合ヲ除クノ外裁判所ハ利害關係人ノ請求  
ニ因リ又ハ職權ヲ以テ清算人ヲ解任スルコトヲ得  
前項ノ規定ニ依リ清算人ヲ解任シタルトキハ裁判所ハ清算人  
ヲ選任スルコトヲ得

第二十九條 裁判所ハ銀行ノ清算事務及財産ノ狀況ヲ檢査シ、  
財産ノ供託ヲ命ジ其ノ他清算ノ監督ニ必要ナル命令ヲ爲スコ  
トヲ得

第三十條 銀行ノ清算、破産又ハ強制和議ノ場合ニ於テ裁判所  
ハ銀行ノ檢査監督ニ從事スル官吏ニ對シ意見ヲ求め又ハ檢査  
若ハ調査ヲ囑託スルコトヲ得

第三十一條 銀行ノ清算、破産又ハ強制和議ノ場合ニ於テ銀行  
ノ檢査監督ニ從事スル官吏ハ裁判所ニ對シ意見ヲ述アルコト  
ヲ得

第三十二條 本法施行地外ニ本店ヲ有スル銀行ガ本法施行地内  
ニ支店、出張所又ハ代理店ヲ設ケ銀行業ヲ營マントスルトキ  
ハ各營業所毎ニ代表者ヲ定メ第二條ノ規定ニ依リ免許ヲ受ケ  
ルベシ

前項ノ規定ニ依リ免許ヲ受ケタルトキハ該營業所ハ本法ノ適用ニ付テ之ヲ銀行ト看做ス此ノ場合ニ於テハ第三條乃至第六條、第八條、第十二條乃至第十七條、第二十五條及第二十七條乃至前條ノ規定ニ拘ラズ命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設ケルコトヲ得

第一項ノ免許ニ付テハ主務大臣ハ特ニ必要ナル制限ヲ附スルコトヲ得

第三十三條 主務大臣ノ免許ヲ受ケズシテ銀行業ヲ營ミタル者ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 左ノ場合ニ於テハ取締役、監査役、支配人、清算人又ハ本法施行地外ニ本店ヲ有スル銀行ノ本法施行地ニ於ケル代表者ヲ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 業務報告書又ハ監査書ノ不實ノ記載、行價ノ公告其ノ他ノ方法ニ依リ官廳又ハ公衆ヲ欺罔シタルトキ

二 本法ニ依リ検査ノ際シ帳簿書類ノ隠蔽、不實ノ申立其ノ他ノ方法ニ依リ検査ヲ妨ゲタルトキ

第三十五條 左ノ場合ニ於テハ取締役、監査役、支配人、代理店主、代理店主法人ナルトキハ其ノ業務ヲ執行スル社員、取締役其ノ他法人ノ代表者又ハ外國會社ノ代表者、清算人又ハ本法施行地外ニ本店ヲ有スル銀行ノ本法施行地ニ於ケル代表者ヲ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス但シ其ノ行爲ニ付刑ヲ科スベキトキハ此ノ限ニ在ラズ

一 第五條乃至第八條又ハ第十三條ノ規定ニ違反シタルトキ

二 第十七條ニ於テ準用スル貯蓄銀行法第九條ノ規定ニ違反シタルトキ

三 本法ニ依リ銀行ニ備ヘ置クベキ書類ノ備付若ハ主務大臣ニ提出スベキ書類ノ提出ヲ怠リ、之ニ記載スベキ事項ヲ記載セズ又ハ之ニ不實ノ記載ヲ爲シタルトキ

四 本法ニ定メタル届出若ハ公告ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不實ノ届出若ハ公告ヲ爲シタルトキ

五 第二十二條、第二十三條、第二十六條又ハ第二十九條ノ規定ニ依リ主務大臣又ハ裁判所ノ爲シタル命令ニ違反シタルトキ

六 本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキ

第三十六條 第四條第二項ノ規定ニ違反シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ過料ニ處ス

第三十七條 銀行ガ本法ニ依リ爲スベキ公告ハ新聞紙ニ依ルベシ

第三十八條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十九條 銀行條例ハ之ヲ廢止ス

舊法ニ依リテ營業ノ認可ヲ受ケタル銀行ニシテ本法施行ノ際現ニ存スルモノハ第四十條及第四十一條ノ定ムル制限ニ從ヒ本法ニ依リテ免許ヲ受ケタル銀行ト看做ス

舊法ニ依リテ爲シタル認可、處分其ノ他ノ行爲ハ本法中之ニ相當スル規定アル場合ニ於テハ本法ニ依リテ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四十條 前條第二項ノ銀行ニシテ株式會社又ハ外國銀行以外ノモノハ本法施行後五年ヲ限り仍其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得

商法施行前ニ設立シタル合資會社ニシテ舊法ニ依リ營業ノ認可ヲ受ケタル銀行ガ本法施行後五年内ニ其ノ組織ヲ變更シ又ハ合併ニ因リ株式會社ト爲リタルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得

前項ノ組織變更ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第四十一條 第三十九條第二項ノ銀行ノ資本金ニ付テハ本法施

行ノ規定ニ依リ免許ヲ受ケタルトキハ該營業所ハ本法ノ適用ニ付テ之ヲ銀行ト看做ス此ノ場合ニ於テハ第三條乃至第六條、第八條、第十二條乃至第十七條、第二十五條及第二十七條乃至前條ノ規定ニ拘ラズ命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設ケルコトヲ得

第一項ノ免許ニ付テハ主務大臣ハ特ニ必要ナル制限ヲ附スルコトヲ得

第三十三條 主務大臣ノ免許ヲ受ケズシテ銀行業ヲ營ミタル者ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 左ノ場合ニ於テハ取締役、監査役、支配人、清算人又ハ本法施行地外ニ本店ヲ有スル銀行ノ本法施行地ニ於ケル代表者ヲ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 業務報告書又ハ監査書ノ不實ノ記載、行價ノ公告其ノ他ノ方法ニ依リ官廳又ハ公衆ヲ欺罔シタルトキ

二 本法ニ依リ検査ノ際シ帳簿書類ノ隠蔽、不實ノ申立其ノ他ノ方法ニ依リ検査ヲ妨ゲタルトキ

第三十五條 左ノ場合ニ於テハ取締役、監査役、支配人、代理店主、代理店主法人ナルトキハ其ノ業務ヲ執行スル社員、取締役其ノ他法人ノ代表者又ハ外國會社ノ代表者、清算人又ハ本法施行地外ニ本店ヲ有スル銀行ノ本法施行地ニ於ケル代表者ヲ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス但シ其ノ行爲ニ付刑ヲ科スベキトキハ此ノ限ニ在ラズ

一 第五條乃至第八條又ハ第十三條ノ規定ニ違反シタルトキ

二 第十七條ニ於テ準用スル貯蓄銀行法第九條ノ規定ニ違反シタルトキ

三 本法ニ依リ銀行ニ備ヘ置クベキ書類ノ備付若ハ主務大臣ニ提出スベキ書類ノ提出ヲ怠リ、之ニ記載スベキ事項ヲ記載セズ又ハ之ニ不實ノ記載ヲ爲シタルトキ

行後五年ヲ限り第三條第一項本文ノ規定ヲ適用セズ第三十九條第二項ノ銀行ノ合併ニ因リテ設立シタル銀行ノ資本金ニ付亦同ジ

命令ヲ以テ定ムル人口一萬未満ノ地ニ本法施行ノ際現ニ本店ヲ有スル銀行ニ付テハ第三條第一項本文ノ規定ヲ適用セズ但シ其ノ資本金ハ本法施行後五年内ニ五十萬圓以上ト爲スコトヲ要ス

第四十二條 本法施行ノ際現ニ銀行ニシテ其ノ商號中ニ銀行ナル文字ヲ用ヒザルモノ及銀行ニ非ズシテ其ノ商號中ニ銀行タルコトヲ示スベキ文字ヲ用フルモノニ付テハ本法施行後六月ヲ限り第四條ノ規定ヲ適用セズ

第四十三條 本法施行ノ際現ニ第五條ノ業務以外ノ業務ヲ營ム銀行ハ本法施行後五年ヲ限り仍其ノ業務ヲ繼續スルコトヲ得

第四十四條 第三十九條第二項ノ銀行ノ本法施行ノ際現ニ有スル本店及支店以外ノ營業所又ハ代理店ハ本法施行後一年内ニ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ存續スルコトヲ得ズ前項ノ認可申請書ハ本法施行後三月内ニ主務大臣ニ提出スベシ

第四十五條 本法施行ノ際現ニ銀行ノ常務ニ從事スル取締役又ハ支配人ニシテ他ノ會社ノ常務ニ從事スル者ハ本法施行後一年ヲ限り主務大臣ノ認可ヲ受ケズシテ引續キ其ノ會社ノ常務ニ從事スルコトヲ得

第四十六條 第三十九條第二項ノ銀行ニシテ株式會社又ハ外國銀行以外ノモノノ業務廢止ニ付テハ主務大臣ノ認可ヲ受ケベシ

第四十七條 本法中取締役ニ關スル規定ハ第三十九條第二項ノ銀行ニシテ株式會社又ハ外國銀行以外ノモノニ付テハ其ノ營業主(營業主法人ナルトキハ其ノ職務ヲ執行スル社員)ニ之ヲ準用ス

[參照]

明治三十二年(三月九日公布)法律第四十八號商法抄錄第七十八條 會社カ合併ノ決議ヲ爲シタルトキハ其決議ノ日ヨリ二週内ニ財産目録及ヒ貸借對照表ヲ作ルコトヲ要ス會社ハ前項ノ期間内ニ其債權者ニ對シ異議アラハ一定ノ期間内ニ之ヲ述フヘキ旨ヲ公告シ且知レタル債權者ニハ各別ニ之ヲ催告スルコトヲ要ス但其期間ハ二ヶ月ヲ下ルコトヲ得ス

第二十條ノ二 資本金減少ノ爲メ株式ヲ併合スヘキ場合ニ於テハ會社ハ株主ニ對シ一定ノ期間内ニ株券ヲ會社ニ提供スヘキ旨及ヒ其期間内ニ之ヲ提供セザルトキハ株主ノ權利ヲ失フヘキ旨ヲ通知スルコトヲ得但其期間ハ三ヶ月ヲ下ルコトヲ得ス

第一條第一項

左ニ掲グル業務ヲ營ム者ハ之ヲ貯蓄銀行トス

一 複利ノ方法ニ依リ預金ヲ受入ルルコト

二 一回十圓未満ノ金額ヲ預金トシテ受入ルルコト

三 豫メ拂戻ノ期限ヲ定メ定期ニ又ハ一定ノ期間内ニ於テ數回ニ預金ヲ受入ルルコト

四 期限ヲ定メテ一定金額ノ給付ヲ爲スコトヲ約シ定期ニ又ハ一定ノ期間内ニ於テ數回ニ金銭ヲ受入ルルコト

第九條 貯蓄銀行ハ第一條第一項及第五條第一號第五號ノ規定ニ依リ受入レタル金額ノ三分ノ一以上ノ金額ニ相當スル國債ヲ供託スヘシ但シ供託金額中受入金額ノ五分ノ一ヲ超

ユル額ニ付テハ第十一條第一項第一號ノ有價證券ヲ以テ國債ニ代フルコトヲ得

前項ノ受入金額ハ每半年末日現在ニ依リ之ヲ定ム

第十條 預金者及第一條第一項第四號ノ規定ニ依リ給付金ノ

債權者ハ其ノ預金及給付金ニ關シテハ前條ノ規定ニ依リテ  
供託シタル國債及有價證券ニ付他ノ債權者ニ先チ辨濟ヲ受  
クルノ權利ヲ有ス

第十五條 貯蓄銀行カ其ノ財産ヲ以テ債務ヲ完済スルコト能  
ハサルニ至リタルトキハ第一條第一項及第五條第一號第五  
號ノ規定ニ依ル契約ニ基テ銀行ノ債務ニ付各取締役ハ連帶  
シテ其ノ辨濟ノ責ニ任ス

前項ノ責任ハ取締役ノ退任登記前ノ債務ニ付退任登記後二  
年間内存續ス

### 震災手形損失補償公債法

法律第十九號 (昭和二年三月二十九日)

第一條 大正十二年勅令第四百二十四號及大正十四年法律第三  
十五號ニ依ル契約ニ基キ政府カ日本銀行ニ對シテ支拂フヘキ  
損失補償金ハ五分利附國債證券ヲ以テ之ヲ交付ス

第二條 政府ハ前條ノ規定ニ依リ交付スル爲一億圓ヲ限リ公債  
ヲ發行スルコトヲ得

第三條 前條ノ規定ニ依リ發行スル公債ノ交付價額カ一億圓ニ  
達セザルトキハ其ノ差額ヲ補填スル爲前條ノ制限以外ニ公債  
ヲ發行スルコトヲ得

第四條 本法ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參酌  
シテ大藏大臣之ヲ定ム

[參照]

大正十二年(九月二十七日公布勅令)第四百二十四號

政府ハ日本銀行カ左ノ各號ノ一ニ該當スル手形ニシテ大正十  
四年九月三十日以前ノ滿期日ヲ有スルモノノ割引ヲ爲シ之ニ  
因リテ損失ヲ受ケタル場合ニ於テ壹億圓ヲ限リ同行ニ對シ其  
ノ損失ヲ補償スルノ契約ヲ爲スコトヲ得但シ第一號乃至第三

號ニ規定スル手形ノ割引ハ大正十三年三月三十一日迄ニ爲シ  
タルモノニ限ル

一 震災地(東京府、神奈川縣、埼玉縣、千葉縣及靜岡縣ヲ  
謂フ以下同シ)ヲ支拂地トスル手形又ハ震災地ニ震災ノ當  
時營業所ヲ有シタル者ノ振出シタル手形若ハ之ヲ支拂入ト  
スル手形ニシテ大正十二年九月一日以前ニ銀行ノ割引シタ  
ルモノ

二 前號ニ規定スル手形ノ書換ノ爲ニ振出シタル手形  
三 前二號ニ規定スル手形又ハ震災地ニ營業所ヲ有スル銀行  
カ他ノ銀行ニ對シ大正十二年九月一日以前ニ發行シタル預  
金證書若ハ「コールローン」ノ證書ヲ擔保トシテ銀行ノ振出  
シタル手形

四 前三號ニ規定スル手形ニシテ日本銀行ノ割引シタルモノ  
ノ書換ノ爲ニ振出シタル手形  
日本銀行ハ本令ニ依リテ爲ス手形ノ割引ニ付政府ノ監督ヲ受  
クヘシ

大正十四年(三月三十一日公布)法律第三十五號

政府ハ日本銀行カ大正十二年勅令第四百二十四號第一項第四  
號ニ該當スル手形ニシテ大正十四年十月一日ヨリ大正十六年  
九月三十日迄ノ間ニ於ケル滿期日ヲ有スルモノノ割引ヲ爲シ  
之ニ因リテ損失ヲ受ケタル場合ニ於テ同行ニ對シ其ノ損失ヲ  
補償スルノ契約ヲ爲スコトヲ得

前項補償金額ハ大正十二年勅令第四百二十四號ニ依ル補償金  
額ト合シテ一億圓ヲ超ユルコトヲ得ス

日本銀行ハ本法ニ依リテ爲ス手形ノ割引ニ付政府ノ監督ヲ受  
クヘシ

### 震災手形善後處理法

法律第二十號 (昭和二年三月二十九日)

第一條 本法ニ於テ震災手形ト稱スルハ大正十二年勅令第四百二十四號第一項第四號ニ該當スル手形ヲ謂フ

第二條 政府ハ昭和二年九月三十日ニ於テ日本銀行ヨリ震災手形ノ割引ヲ受ケ居ル銀行(以下震災手形所持銀行ト稱ス)ニ對シ該震災手形ノ整理ヲ爲サシムル爲メ本法ノ定ムル所ニ依リ貸付金ヲ爲スコトヲ得

前項ノ貸付金ハ五分利附國債證券ヲ以テ之ヲ交付ス  
第三條 政府ハ前條ノ規定ニ依リ交付スル爲メ必要ナル額ノ限度トシ公債ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ總額ハ震災手形損失補償公債法ニ依リ發行スル公債ト通シテ二億七百萬圓ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條 前條並震災手形損失補償公債法第二條及第三條ノ規定ニ依リ發行スル公債ノ交付價額カ通シテ二億七百萬圓ニ達セサルトキハ其ノ差額ヲ補填スル爲メ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行スルコトヲ得

第五條 本法ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參酌シテ大藏大臣之ヲ定ム  
第六條 第二條ノ貸付ハ震災手形所持銀行カ其ノ震災手形債務者トノ間ニ其ノ手形債務ヲ更改スル爲メ十年以内ノ年賦償還貸付契約 締結シタル場合ニ非サレハ之ヲ爲サス

第七條 第二條ノ貸付ノ期限ハ十年以内トシ其ノ利率ハ年五分以上トス  
前項ノ外貸付金ニ關シテハ大藏大臣之ヲ定ム

第八條 第二條ノ貸付ノ辨濟金ニ相當スル金額ハ國債整理基金特別會計法第二條ノ規定ニ依リ繰入ノ外本法ニ依リ發行シタル公債ノ償還ニ充ツル爲メ之ヲ一般會計ノ國債整理基金特別會計ニ繰入ルヘシ但シ本法ニ依リ發行シタル公債ノ前年度首

ニ於ケル未償還額ノ萬分ノ百十六ニ相當スル金額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第九條 第二條ノ貸付ニ關スル事務ハ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシム

前項ノ事務ノ取扱ニ要スル經費ハ日本銀行ノ負擔トス  
第十條 震災手形所持銀行ニ對シ第二條ノ貸付確定前ニ於テ日本銀行カ昭和二年十月一日ヨリ同年十一月三十日迄ノ間ニ於ケル滿期日有スル震災手形ノ割引キタルトキハ該震災手形ニ關シテハ大正十四年法律第三十五號ヲ準用ス

前項ノ規定ニ依リ契約ニ基キ政府カ日本銀行ニ對シテ爲メキ損失補償ニ關シテハ第三條及第四條ノ規定並震災手形損失補償公債法ヲ準用ス

〔參照〕  
明治三十九年(三月二日)公布法律第六號國債整理基金特別會計法抄錄  
第二條 國債整理基金ニ充ツヘキ資金ハ毎年度一般會計又ハ特別會計ヨリ之ヲ國債整理基金特別會計ニ繰入ルヘシ

前項繰入額ノ中國債ノ元金償還ニ充ツヘキ金額ハ前年度首ニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トシ三千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトス

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ大藏省證券、借入金、臨時國庫證券及米穀證券ハ之ヲ國債ト看做サス

### 兌換銀行券整理法

法律第四十六號 (昭和二年三月三十一日)

第一條 日本銀行ガ發行シタル左記種額ノ兌換銀行券ハ昭和十四年三月三十一日限り強制通用ノ效力ヲ失フモノトス但シ政府又ハ日本銀行ニ於テ受入ルル場合ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第一 五圓券  
一 明治十八年十二月大藏省告示第百六十六號ノ分

二 明治二十一年十一月大藏省告示第百四十號ノ分

三 明治三十二年三月大藏省告示第百七號ノ分

四 明治四十三年八月大藏省告示第百七號ノ分

五 大正五年十二月大藏省告示第百六十三號ノ分

第二拾捌券

一 明治十八年一月大藏省告示第十二號ノ分

二 明治二十三年七月大藏省告示第三十三號ノ分

三 明治三十二年九月大藏省告示第五十一號ノ分

四 大正四年四月大藏省告示第四十四號ノ分

第三貳拾圓券

一 大正六年十一月大藏省告示第百七十六號ノ分

第四百圓券

一 明治十八年八月大藏省告示第百十九號ノ分

二 明治二十四年十一月大藏省告示第三十六號ノ分

三 明治三十三年十二月大藏省告示第五十五號ノ分

四 大正六年八月大藏省告示第百三十六號ノ分

第二條 日ハ銀行ハ昭和十四年三月三十一日ニ於ケル前條ノ兌換銀行券ノ發行高ヲ同年四月一日ニ於ケル兌換銀行券發行高ヨリ除去シ且其ノ除去シタル發行高ニ相當スル金額ヲ即日國庫ニ納付スヘシ

第三條 第一條ノ期限經過後政府ハ同條ノ兌換銀行券ノ引換義務ヲ承繼ス

第四條 第二條ノ規定ニ依リ日本銀行ノ納付スル金額中減失ノ爲前條ノ引換ノ請求ナシト認ムル兌換銀行券ノ額ニ相當スル金額ハ國債整理基金特別會計法第二條ノ規定ニ依ル繰入ノ外之ヲ國債償還ニ充ツル爲漸次一般會計ヨリ國債整理基金特別會計ニ繰入レ其ノ殘餘ニ相當スル金額ハ前條ノ規定ニ依ル引換ノ準備金トシテ日本銀行ヲシテ之ヲ保管セシムヘシ

明治三十九年(三月二日公布)法律第六號國債整理基金特別會計法抄録

第二條 國債整理基金ニ充ツヘキ資金ハ毎年度一般會計又ハ特別會計ヨリ之ヲ國債整理基金特別會計ニ繰入ルヘシ

前項繰入額ノ中國債ノ元金償還ニ充ツヘキ金額ハ前年度首ニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トシ三千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトス

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ大藏省證券、借入金、臨時國庫證券及米穀證券ハ之ヲ國債ト看做サス

第一條 市町村又ハ公益法人ハ本法ニ依リ公益質屋ヲ經營スルコトヲ得

公益法人公益質屋ヲ經營スル場合ニ於テハ業務所ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クベシ

第二條 本法ニ依ル公益質屋ニ非ザレバ其ノ名稱中ニ公益質屋タルコトヲ示スベキ文字ヲ用フルコトヲ得ズ

第三條 國庫ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ豫算ノ範圍内ニ於テ市町村又ハ公益法人ニ對シ公益質屋ノ設備ニ要スル經費ノ二分ノ一以內ヲ補助ス

第四條 貸付金額ハ一口ニ付十圓、一世帯ニ付五十圓ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ地方長官ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 貸付利率ハ一月ニ付百分ノ一二五ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ特別ノ事情アル地方ニ於テ地方長官ノ認可ヲ受ケタル

公益質屋法

法律第三十五號 (昭和二年三月三十日)

換ノ準備金トシテ日本銀行ヲシテ之ヲ保管セシムヘシ

明治三十九年(三月二日公布)法律第六號國債整理基金特別會計法抄録

第二條 國債整理基金ニ充ツヘキ資金ハ毎年度一般會計又ハ特別會計ヨリ之ヲ國債整理基金特別會計ニ繰入ルヘシ

前項繰入額ノ中國債ノ元金償還ニ充ツヘキ金額ハ前年度首ニ於ケル國債總額ノ萬分ノ百十六以上トシ三千萬圓ヲ下ルコトヲ得サルモノトス

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ大藏省證券、借入金、臨時國庫證券及米穀證券ハ之ヲ國債ト看做サス

第一條 市町村又ハ公益法人ハ本法ニ依リ公益質屋ヲ經營スルコトヲ得

公益法人公益質屋ヲ經營スル場合ニ於テハ業務所ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クベシ

第二條 本法ニ依ル公益質屋ニ非ザレバ其ノ名稱中ニ公益質屋タルコトヲ示スベキ文字ヲ用フルコトヲ得ズ

第三條 國庫ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ豫算ノ範圍内ニ於テ市町村又ハ公益法人ニ對シ公益質屋ノ設備ニ要スル經費ノ二分ノ一以內ヲ補助ス

第四條 貸付金額ハ一口ニ付十圓、一世帯ニ付五十圓ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ地方長官ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 貸付利率ハ一月ニ付百分ノ一二五ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ特別ノ事情アル地方ニ於テ地方長官ノ認可ヲ受ケタル



場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

利子ノ計算ニ關スル期間ニ付テハ月ヲ以テ計算シ民法第四百

十條乃至第四百十三條ノ規定ヲ適用ス但シ一月ニ滿テザル日

數ガ十六日以上ナルトキハ之ヲ一月トシ其ノ十六日未滿ナル

トキハ之ヲ半月トシテ計算ス

第六條 貸付金ニ對スル利子ニシテ一錢未滿ノ端數ヲ生ジタル

トキハ其ノ端數ハ之ヲ切捨テ其ノ全額一錢未滿ナルトキハ之

ヲ一錢トス

第七條 公益質屋ニ於テハ其ノ質契約ニ關シ元金及利子ノ外何

等ノ名義ヲ以テスルモ質置主ヨリ金錢其ノ他ノ利益ヲ受ケル

コトヲ得ズ

第八條 流質期限ハ質契約成立ノ日ヨリ四月未滿ノ期間内ニ於

テ之ヲ定ムルコトヲ得ズ四月未滿ノ期間内ニ於テ之ヲ定メタ

ルトキハ其ノ期間ヲ四月トス

第九條 流質期限到來ニ於テ質物ノ交換又ハ質物ノ一部ノ受

取ヲ爲シタルトキト雖モ利子ノ計算及流質期限ニ付テハ質契

約ノ變更ナキモノト看做ス

第十條 質置主ハ命令ノ定ムル所ニ依リ一部辨濟ヲ爲スコトヲ

得

第十一條 流質物ハ競争入札ニ依リ之ヲ賣却スベシ

特別ノ事情アル場合ニ於ケル流質物ノ處分ニ關シテハ命令ヲ

以テ之ヲ定ム

代金ノ計算ニ關シテハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 前條第一項ノ規定ニ依リ交付スベキ殘餘金額ハ之ヲ

質置主ニ通知スベシ

前項ノ通知ヲ發シタル日ヨリ六月ヲ經過シタルトキハ殘餘金

ノ交付ヲ請求スルコトヲ得ズ

第十五條 質屋取締法第二條乃至第八條、第十條乃至第十七條

及第二十條ノ規定ハ公益質屋ニ之ヲ準用ス

質屋取締法第十二條ノ規定ハ第十二條ノ流質物ノ返還及第十

三條第一項ノ殘餘金ノ交付ニ之ヲ準用ス

第十六條 本法ニ違反スル質契約ニシテ質置主ニ不利ナルモノ

ハ其ノ不利ナル部分ニ限り之ヲ爲サザルモノト看做ス

第十七條 公益法人ノ經營スル公益質屋ノ監督上必要アルトキ

ハ地方長官ハ其ノ業務ニ關スル諸般ノ報告ヲ爲サシメ、書類

帳簿ヲ徴シ及業務又ハ會計ヲ檢閲スルコトヲ得

第十八條 第二條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ過料ニ處

ス

非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前項ノ過

料ニ之ヲ準用ス

第十九條 公益質屋ヲ經營スル公益法人ノ理事又ハ從業員左ノ

各號ノ一ニ該當スルトキハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第十五條ノ規定ニ依リ準用スル質屋取締法第二條乃至第

四條、第五條第一項第二項、第六條、第七條第一項、第八

條第一項、第十四條又ハ第十七條ノ規定ニ違反シタルトキ

二 第十五條ノ規定ニ依リ準用スル質屋取締法第十五條ノ場

合ニ於テ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ故意ニ物品若ハ帳簿ヲ毀損

亡失シタルトキ

第二十條 本法中町村ニ關スル規定ハ町村制ヲ施行セザル地ニ

於テハ町村ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

附 則

第二十四卷

九三九

第五號

一六三

法 令

流質物ノ一括シテ賣却シタル場合ニ於ケル各流質物ニ對スル

ニ交付スベシ

命 令

命 令

命 令

命 令

命 令

命 令

命 令

命 令

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
本法施行ノ際ニ市町村又ハ公益法人ノ經營スル公益質屋ハ本  
法ニ依ル公益質屋ト看做ス

市町村又ハ公益法人ノ經營スル公益質屋ニ於テ本法施行前ニ爲  
シタル質屋約ハ本法ニ拘ラス仍其ノ效力ヲ有ス

(參照)

明治二十八年(三月十三日公布)法律第十四號質屋取締法抄

第二條 質屋ハ店舗ノ外ニ於テ營業ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 質屋物品ヲ質ニ取ラムトスルトキハ質置主ニ於テ其  
ノ物品ヲ質入シ得ヘキ權利ヲ有スルコトヲ確認シタル後之  
ヲ爲スヘシ若シ不正品ノ疑アルトキハ直ニ警察官ニ申告スヘ  
シ

第四條 住所、氏名ノ詳カナラサル者ヨリ物品ヲ質ニ取ルコ  
トヲ得ス但シ住所、氏名ノ詳カナル者其ノ證人タルトキ又  
ハ警察官ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條 質屋ハ質屋約及質物處分ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載  
スヘシ

質屋ハ質屋約ノ證トシテ質札又ハ通帳ヲ質置主ニ交付スヘ  
シ

帳簿、質札及通帳ノ製方及様式ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコ  
トヲ得

第六條 質屋ハ左ノ事項ヲ見易キ場所ニ揭示スヘシ

一 流質期限

一 質物ノ災難ニ罹リタルトキノ處辨方

一 質物出入時間

第七條 傳染病毒ニ汚染シタル物品ナリト認ムモノハ消毒  
シタル後ニ非サレハ之ヲ質ニ取ルコトヲ得ス

前項ノ物品ニシテ警察官ニ於テ未ダ消毒セサルモノト認ム  
ルトキハ直ニ消毒法ヲ施サシメ命ニ從ハサレハ之ヲ官沒ス

第八條 質屋ハ質物ヲ使用シ若ハ貸付スルコトヲ得ス

轉賃ハ必要ノ場合ニ限り命令ヲ以テ制限シ若シ禁止スルコ  
トヲ得

第十條 質置主ハ流質期限前ハ何時タリトモ元利金ヲ辨濟シ  
テ其ノ質物ヲ受戻スコトヲ得

第十一條 質屋ハ流質期限經過ノ後何時タリトモ其ノ質物ヲ  
處分スルコトヲ得

第十二條 質屋ハ何人ニ拘ラス質札又ハ通帳ヲ所持スル者ニ  
其ノ質物ヲ返還スルコトヲ得

第十三條 質物ニシテ特ニ識別シ得ヘキ物品ニ限り警察官ニ  
於テ必要アリト認ムルモノハ品觸ヲ發スルコトヲ得

第十四條 質物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日ヲ其ノ品  
觸寫書ニ附記スヘシ品觸到達以後六箇月内ニ品觸ニ相當ス  
ル物品ヲ質ニ取り若ハ質物トシテ占有セルコトヲ覺知スル  
トキハ直ニ警察官ニ届出ヘシ

第十五條 警察官ハ犯罪ノ嫌疑アル物品若ハ遺失物又ハ傳染  
病毒汚染ノ物品アリト認ムルトキハ何時タリトモ質物及帳  
簿ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ十日以内ヲ限り其ノ物品ヲ差押  
ヘ又ハ帳簿ヲ差出サシムルコトヲ得

警察官ニ於テ物品ヲ押收シタルトキハ領置證書ヲ交付スヘ  
シ

第十六條 質物ニシテ遺失物若ハ盜品ニ係ルトキハ警察官之  
ヲ徵收シ被害者ニ還付スルコトヲ得若シ被害者知レザルトキ  
ハ徵收シタル日ヨリ二箇年後被徵收者ニ還付スヘシ

第十七條 營業ニ關スル帳簿ヲ廢棄セムトスルトキハ警察官  
ノ許可ヲ受クヘシ

第二十條 質屋廢業シ若ハ營業ヲ禁止セラレタルトキト雖其  
ノ以前ニ成立シタル質屋約及其ノ質物ニ付テハ尙ホ此ノ法  
律ヲ適用スル停止ノ處分ヲ受ケタル者其ノ期間亦同シ

海外移住組合法

法律第二十五號 (昭和二年三月二十九日)

第一條 海外移住組合ハ組員又ハ組員ト同一ノ家ニ在ル者

ノ海外移住ヲ助成スルヲ以テ目的トス

組合ハ法人トシ其ノ組織ハ有限責任トス

第二條 組合ハ其ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ併セ行フ

一 組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ノ海外移住ニ必要ナル資金ヲ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ニ貸付スルコト

二 組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ノ海外移住ニ必要ナル貯金ノ便宜ヲ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ニ得セシムルコト

三 組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ノ海外移住ニ必要ナル土地、建物其ノ他ノ物件ヲ取得シ又ハ借受ケ之ヲ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ニ讓渡シ又ハ利用セシムルコト

組合ハ前項ニ規定スルモノノ外學校、病院、倉庫其ノ他組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ノ海外移住ニ必要ナル事業ヲ行フコトヲ得

組合ハ第一項ノ規定ニ依リ取得シ又ハ借受ケタル土地、建物其ノ他ノ物件ヲ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ニ讓渡シ又ハ利用セシムルニ至ル迄利用スルコトヲ得

第三條 組合ハ定款ノ定ムル所ニ依リ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者以外ノ者ニシテ海外ニ在住スル者ニ對シ前條第一項及第二項ノ事業ヲ行フコトヲ得

第四條 組合ハ一區域一個ニ限り之ヲ設立スルコトヲ得

第五條 組合員ハ組合ニ關スル一切ノ行爲ヲ代理スベキ者ヲ定メ之ヲ組合ニ届出デタル後ニ非ザレバ海外ニ移住スルコトヲ得

組合員前項ニ規定スル代理人ヲ組合ニ届出デズシテ海外ニ移住シタルトキハ組合ノ會議及組合ノ爲ス通知又ハ催告ニ關スル一切ノ權利ヲ拋棄シタルモノト看做ス

前二項ニ規定スル代理人ハ當該組合ノ區域内ニ居住スル組合員タルコトヲ要ス

第六條 組合ノ理事及監事ハ地方長官ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ海外ニ移住スルコトヲ得ズ

第七條 海外移住組合ハ共同シテ其ノ目的ヲ達スル爲海外移住組合聯合會ヲ設クルコトヲ得

聯合會ハ法人トシ其ノ組織ハ有限責任トス

第八條 聯合會ハ其ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ併セ行フ

一 海外移住組合ノ普及、發達及聯絡ヲ圖ルコト

二 所屬海外移住組合ニ必要ナル資金ヲ貸付シ及貯金ノ便宜ヲ得セシムルコト

三 所屬海外移住組合ガ組合員又ハ組合員ト同一ノ家ニ在ル者ニ讓渡シ又ハ利用セシムルベキ土地、建物其ノ他ノ物件ヲ取得シ又ハ借受ケ之ヲ所屬海外移住組合ニ讓渡シ又ハ利用セシムルコト

第二條第二項、第三項及第三條ノ規定ハ聯合會ニ之ヲ準用ス

第九條 聯合會ハ全國ヲ通ジテ一個トシ其ノ設立ハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ

第十條 海外移住組合以外ノ者ト雖モ定款ノ定ムル所ニ依リ聯合會ノ會員ト爲ルコトヲ得

第十一條 聯合會ノ理事及監事ハ會員タル海外移住組合ノ理事及監事並ニ前條ノ規定ニ依リ會員ト爲リタル者ノ中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選任スベシ但シ特別ノ事出アルトキハ其ノ他ノ者ヨリ選任スルコトヲ得

前項但書ノ規定ニ依ル選任ハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第十二條 聯合會ハ主務大臣之ヲ監督ス

第十三條 第六條ノ規定ハ聯合會ノ理事及監事ニ之ヲ準用ス但シ地方長官トアルハ主務大臣トス

第十四條 産業組合法第一條 第二條第一項、第四條第一項、第六條ノ二、第九條第二項、第十六條ノ六第二項、第四十二條、第四十六條ノ二、第四十七條ノ三、第四十九條、第五十八條、第六十八條、第七十六條乃至第七十七條、第七十九條、第八十條第一項、第八十一條但書及第八十二條乃至第九十二條ノ規定ヲ除クノ外産業組合法中産業組合ニ關スル規定ハ海外移住組合ニ、同法中産業組合聯合會ニ關スル規定ハ海外移住組合聯合會ニ之ヲ準用ス但シ海外移住組合聯合會ニ付

テハ同法第八十一條ノ規定ニ依リ準用スル産業組合ニ關スル規定中地方長官トアルハ主務大臣トス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

輸出絹織物取締法

法律第二十七號 (昭和二年三月三十日)

第一條 輸出絹織物ハ命令ノ定ムル所ニ依リ輸出絹織物検査所

ノ検査ニ合格シタルモノニ非サレハ營利ノ目的ヲ以テ之ヲ輸

出スルコトヲ得ズ但シ特別ノ事情ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受

ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 主務大臣ハ輸出絹織物ノ聲價ノ維持向上ヲ圖ルガ爲輸

出絹織物ニ關スル増量ノ制限禁止、品質品種ヲ識別スベキ表

示其ノ他ノ事項ニ付取締上必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

第三條 輸出絹織物ノ精練業ハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣

ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ營ムコトヲ得ズ

第四條 主務大臣ハ輸出絹織物ノ精練又ハ染色ニ關スル工場設

備、作業方法、使用材料其ノ他ノ事項ニ付輸出絹織物ノ聲價

ノ維持向上ヲ圖ルガ爲必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコ

トヲ得

第五條 輸出絹織物ノ精練業者其ノ業務ニ關シ本法若ハ本法ニ

基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シ又ハ公益

ヲ害スベキ行爲ヲ爲シタルトキハ主務大臣ハ第三條ノ許可ヲ

取消スルコトヲ得

第六條 當該官吏取締上必要アリト認ムルトキハ工場、店舗、

倉庫其ノ他ノ場所 臨檢シ物品、帳簿其ノ他ノ物件ノ検査ヲ

爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯スベシ

第七條 輸出絹織物ノ検査ニ關シ之ニ附シタル輸出絹織物検査

所ノ印章又ハ記號ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ抹消、除却又ハ

隱蔽スルコトヲ得ズ

前項ノ印章又ハ記號ヲ抹消、除却又ハ隱蔽シタル輸出絹織物

ハ之ヲ輸出スルコトヲ得ズ

第八條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 シ又ハ輸出セシタル所ノ規定ニ違反シ輸出絹織物ヲ輸出

シ又ハ輸出セシタル所ノ規定ニ違反シタル者

二 第三條又ハ前條第一項ノ規定ニ違反シタル者

三 第二條ノ規定ニ依リ命令又ハ第四條ノ規定ニ依リ命令若

ハ處分ニ違反シタル者

第九條 正當ノ理由ナクシテ第六條ノ規定ニ依リ當該官吏ノ臨

檢検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シ又ハ其ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲

サズ若ハ虚偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 輸出絹織物ニ關スル營業者ハ其ノ代理人、戶主、家

族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ガ本法若ハ本法ニ基キテ發

スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルモノトシテ自己ノ

指揮ニ出デザルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ズ

第十一條 本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲

ス處分ニ違反シタルニ依リ輸出絹織物ニ關スル營業者ニ適用

スベキ罰則ハ其ノ者ガ法人ナルトキハ理事、取締役其ノ他ノ

法人ノ業務ヲ執行スル役員、未成年者又ハ禁治産者ナルト

キハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同

一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

輸出羽二重精練業法ハ之ヲ廢止ス

本法施行ノ際現ニ輸出羽二重精練業法ニ依リ許可ヲ受ケ輸出絹

織物ノ精練業ヲ營ム者ハ第三條ノ許可ヲ受ケタルモノト看做

ス

本法施行前ニ府縣ノ輸出絹織物検査所ノ検査ニ合格シタル輸出

絹織物ハ第一條ノ規定ニ拘ラズ之ヲ輸出スルコトヲ得

本法施行前ニ隱蔽シタル輸出絹織物ニシテ前項ノ規定ニ該當セ

ザルモノハ本法施行ノ日より六月間第一條ノ規定ニ拘ラズ之ヲ輸出

ヲ受ケルコトヲ得